

文山区と新店の歴史スポットを訪ねる（前編）

片倉 佳史

台北の歴史をたどる旅。今や人口260万を数える大都市に発展している台北市だが、その歴史は随所で日本と関わりをもち、結ばれている。今回は台北市南部の文山区と新北市新店区に残る日本統治時代の遺構をたどってみたい。

南と東に伸びていった台北市

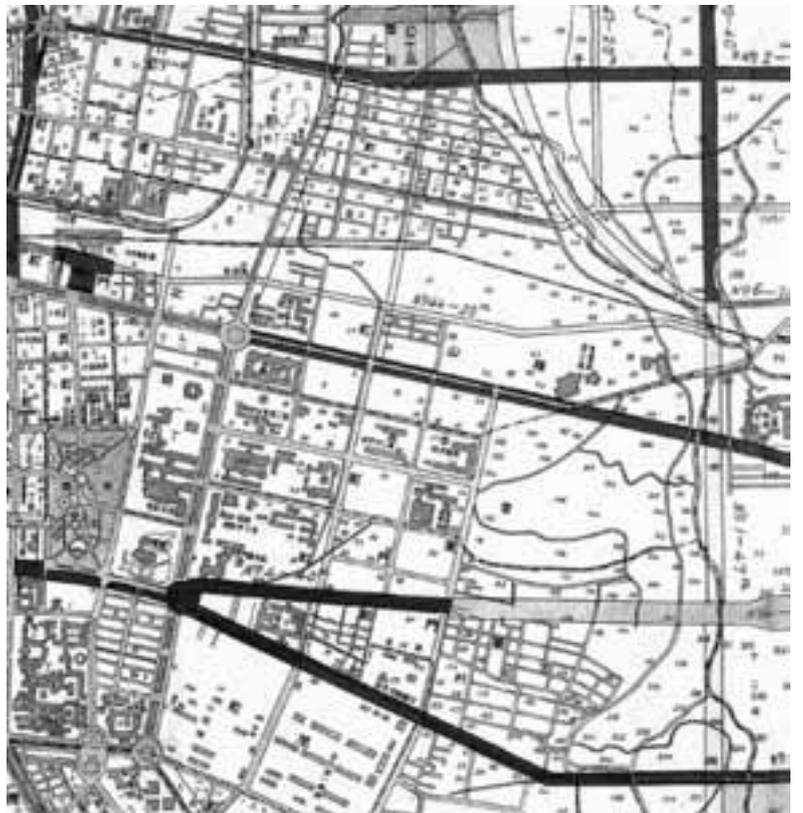
台北市は日本統治時代を迎える以前、つまり、清国統治時代は萬華（まんか）と大稻埕（だいとうてい）の両エリアが中枢となっていた。これは淡水河の水運による場所が多く、当初は萬華が交易の場として発達したが、土砂の堆積によって港灣機能が低下し、繁栄が大稻埕に移る。19世紀後半には台北城が築城され、1895年に台湾が日本に割譲された後も、ここが行政の中心として機能していく。

日本統治時代の台北は順調な発展を遂げ、巨大化していった。当初、内地人と呼ばれた日本本土出身者とその子孫が住んでいたのは旧台北城内だったが、のちに西門町が開けるようになり、大正時代には鉄道線路の北側の大正町（現林森北路周辺）にも内地人街が形成される。このほか、旧台湾総督府専売局のあった児玉町界隈（現南昌路周辺）にも内地人は多く住んでいた。

肥大化する台北は最初は南に、そして、東に市街地をのばしていった。南には台北帝国大学（現国立台湾大学）や水源地（現自来水博物館）が設けられ、富田町や水道町、昭和町などがあった。東は縦貫道路（現八徳路）が軸となって発達したが、1932（昭和7）年の都市計画ではすでに現在の忠孝東路や仁愛路・信義路などの整備が予定されている。これは戦争によって実現しなかったが、戦後、設計

図は中華民国政府に受け継がれ、整備されることになった。

今回は台北市南部、現在は文山区と呼ばれているエリアと新北市新店区に残る日本統治時代の遺構を紹介してみたい。他のエリアに比べると、日本とのかかわりは薄いようにも見える両地区だが、よくよく訪ね歩いてみると、そこかしこに日本の面影を感じ取ることができる。週末の散策にこういった遺構を訪ね、歴史に思いを巡らせるのも面白いかもしれない。



昭和7年に立てられた都市計画地図。日本統治時代には完成しなかったが、忠孝東路や南京東路、仁愛路、信義路、建国南北路などはすでに整備が計画されていた。

公民館となった校長官舎を訪ねる

文山公民会館。現在はそう呼ばれているこの建物は日本統治時代の校長官舎である。正式には台北州深坑庄木柵国民学校長官舎。現在は公民館として使用されている。

木柵（もくさく）は現在でこそ台北市に組み込まれているが、日本統治時代は台北州文山郡深坑庄に属していた。木柵に設けられた教育機関は1906（明治39）年に設立された景尾公学校内湖分校を起源とし、1912年に木柵公学校となった。1941年には学制の改正によって、公学校は国民学校と改称されている。そして、戦後に木柵国民小学となって現在に至る。

この建物が竣工したのは1927（昭和2）年のことだった。日本統治時代の官舎によく見られたスタイルで、屋根には日本式の黒瓦を擁している。玄関は中央に位置しているが、間取りは左右非対称となっているのが興味深い。敷地面積は636平方メートルという記録が残っている。

私は日本統治時代にこの官舎を訪れたことがあるという若狭靖子さん（岡山市在住）に往時の話をうかがう機会を得た。当時、屋内は板敷きの応接間のほか、畳部屋があり、前庭にはザボンやバナナなどが植えられていたという。

戦後も長らく校長の官舎として使用されていたというが、数年前からは空き家となっていた。遺棄されていた時間が長かったこともあり、建物の傷みは大きかった。それでも取り壊しには反対の声が大きく、大がかりな修復工事の上、ここを公共空間とする計画が立てられた。その工事が終わったのは2002年だったが、安全面の確保から、建物の基礎部分から一新する必要があったという。

建物正面の壁面は改められており、正直なところ、木造家屋の趣は感じられない。しかし、屋根や回廊などは原貌に忠実で、復元に際しての心遣いが感じられる。台湾ではこういった歴史空間が再利用されるケースが多く見られるが、ここは文山で唯一残っている日本統治時代の家屋であり、その価値が評価されている。台湾の人々が歴



公民館として生まれ変わった木造官舎。公共スペースとして整備されている。向かいには文山区行政中心（区役所）がある。



緑地には1897（明治30）年に建てられた忠魂碑が移設保存されている。残念ながら、現在は文字を読みとることができない。

史を伝える建造物が大切に扱う姿をここでも目にすることができる。

石燈籠が並ぶ指南宮旧参道

文山区には指南宮と呼ばれる名刹がある。ここは台湾北部における道教の聖地で、台湾でも指折りの規模を誇る寺廟である。俗称は仙公廟。海拔223メートルの地点にあり、猴山岳と呼ばれる山峰の中腹に位置している。

ここからの見晴らしは素晴らしく、また、一帯が文山包種茶の産地になっていることもあって、谷向かいの猫空地区には台湾茶を楽しむ茶芸館や喫茶店、カフェが並んでいる。2007年夏には台北市が運営するロープウェーも開業し、アクセスが格段便利になった。地元の若者たちはもちろん、外国人旅行者の姿を見かけることも少なくない。

この廟が開かれたのは台湾が清国の統治下に



指南宮は庶民信仰の場として終日参拝客が絶えない。現在はバスのみならず、ロープウェーを利用して訪れることもできる。

あった1891年に遡る。これまでに何度かの改築工事が行なわれ、現在の正殿は戦後になってから建てられたものである。一見したかぎりでは戦前の建造物は見られないように思えてしまうが、旧参道に日本統治時代の遺構が残っていた。

石段がひたすら続く旧参道

現在、指南宮へ向かう際に通る道路は、戦後に設けられたものである。これを利用すれば、バスや自家用車で門前街の入口まで行くことができる。この道路が開通する以前は、誰もが1200段という長い石段を上がらなければならなかった。今となっては旧参道を利用する参拝客は皆無に等しく、見かけるのはハイキングを楽しむ人々と健康維持のために身体を鍛える老人だけである。

私が指南宮を訪れる際も決まってバスを利用していたが、ある日、車窓に古めかしい石燈籠が見えた。ほんの一瞬のことだったが、それが「日本式」であることは判別できた。灰色にくすんだその姿は時の経過を強く感じさせていた。

バスを降り、その方向に歩いていくと、民家の脇で、石燈籠が生い茂った樹木に埋もれるように立っていた。

ここは指南宮旧参道の入口だった。表通りからは少し離れている。両脇には民家が迫るように並んでおり、その間に石段が伸びている。その先にもいくつかの石燈籠が見える。改めて近付いてみると、奉納者の氏名が刻まれていた。いずれも台湾人の姓名だった。

刻まれた文字は無傷で残っていた。しかし、建立日時が刻まれた部分だけは例外で、たとえば、「昭和」とあった場所は判読できないように削り取られていた。これは言うまでもなく、戦後の行政指導でなされた行為である。

指南宮は庶民信仰の場であり、人々の生活に密着した存在である。当然、地元住民が抱く思い入れは強い。日本統治時代初期、台湾総督府は神社創建を全島で推進しながらも、ある程度は土着の信仰や習慣を尊重していたふしがある。しかし、昭和時代に入って皇民化運動（台湾人を日本人に同化させる政策）が盛んになると、伝統的な寺廟を廃止させ、神社の参拝に一本化するという動きが顕著となっていた。

こういった寺廟の排斥は、特に台南州や新竹州で行なわれたが、その前段階として、廟に寄進される石燈籠を日本式に改めるということが行なわれた。こういった例は台北の龍山寺や鹿港の天后宮などでも実施されている。現在も日本式の石燈籠が廟の境内に残るケースは各地で見られる。

しかし、こういった日本式の石燈籠は積極的に管理されているわけではない。長年にわたって風雨に晒されたため、風化しているものが多い。また、暴風雨や土砂崩れによって倒壊したものも少なくない。旧参道の存在と同様、人々から忘れられ、朽ち果てていった。早朝や夜間に参拝客の足下を照らしていた石燈籠も、静かに苔むしていく運命にあるようだ。



旧参道の入口は路地の奥にある。指南宮を参拝する信者は多いが、現在はバス道路が完成しており、旧参道を歩く参拝者は少ない。日本統治時代は「指南山参拝道路」と呼ばれていた。



石灯籠はほぼ原型をとどめている。寄進者はいずれも台湾人である。文山郡は日本統治時代の行政区分で、現在の台湾に「郡」というものは存在しない。参拝道路の先には紀元二六〇〇年を記念した彫像も残っている。



旧参道の入口はわかりにくい場所にあるが、往時の面影は残っている。石灯籠はほぼ原型をとどめている。

新店の神社跡地と遺構を訪ねる

厳密には台北市内ではないが、南郊に残る日本統治時代の遺構を紹介してみたい。

新北市新店区にある神社の遺跡である。新店には文山神社が設けられていた。これは、文山郡を鎮護する社とされていた。祭神には明治天皇以下、大国魂命、大己貴命、少彦名命、そして北白

川宮能久親王を祀っていた。

この神社の鎮座式が挙行されたのは1939（昭和14）年4月7日。台湾人のアイデンティティを日本人化しようと試みた「皇民化運動」に連動して設けられた。これらの神社は日本統治時代初期に創建された神社に比べると規模が大きく、市街地からはやや離れてはいるが、しっかりと神苑を確保した上で建造されている。

日本統治時代、新店は台北州文山郡に属し、新店庄を名乗っていた。昭和17年度末の統計では文山郡の人口は6万7075名となっているが、そのうち、2万4174名が新店庄民であった。なお、文山郡は新店庄のほか、深坑（しんこう）庄、石碇（せきてい）庄、坪林（へいりん）庄の各庄を管轄していた。

神社の跡地は中华民国空軍の軍人墓地となっている。かつての神苑は整地されており、神社らしい雰囲気は感じられない。鳥居があったと思われる場所にも中華風の装飾を施した牌楼（ゲート）が設けられている。

日本統治時代に撮影された古写真を見ると、この神社には数多くの石灯籠が並んでいたようである。しかし、これらは痕跡を残しておらず、往時を偲ぶことはできない。わずかに石灯籠の土台と思われる石塊が確認できるばかりである。本殿や拝殿、手水舎なども姿を留めてはいない。

しかし、軍人墓地にいたる手前の太平宮という廟に立ち寄ってみると、ここには神社のものと思われる狛犬が置かれていた。雌雄一対あり、大きなものである。狛犬はその源流を考えると、中国大陆の文化との接点は深いものがある。そのためか、戦後の台湾に君臨し、日本統治時代の遺構を排除しようとした国民党政府や外省人官僚たちも撤去することは少なかった。ここもそういった流れの上にあると考えていいだろう。

さらに、やや意外とも思える場所にも神社の遺構が存在していた。

MRT 新店駅の近くにある瑠公新店紀念大樓というビルの敷地内に神社の手水鉢が置かれていた。正面には「奉獻」の文字が大きく刻まれ、下

には奉納者と思われる「瑠公水利組合」の名がある。これは新店溪から取水し、台北への供水を図った用水路のことで、古くは「瑠公圳」と呼ばれていた。水路は日本統治時代に拡張され、現在は台北市公館から新生南路～新生北路の下を流れて基隆河に至っている。

なお、側面には「昭和十四年二月建之」の文字もはっきり読み取れる。これらがここに置かれた時期などは不明だが、その経緯は興味の尽きないところである。

次回は台北東部の信義区に残る日本統治時代の遺構を紹介してみたい。

(前編終わり、次号に続く)



文山神社の狛犬。空軍墓地の建設が決まり、神社の施設が取り壊された際、運び込まれたものだという。



文山神社の敷地は空軍烈士公墓という墓地になっている。鳥居のあった場所は牌楼があるが、それ以外は神社らしい雰囲気は感じられない。



手水鉢は MRT 新店駅に近いビルの敷地に置かれていた。駅からは川沿いの遊歩道を歩いていくと見える。

片倉佳史 (かたくら よしふみ)

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックはのべ35冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けているほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。著書に『台湾 鉄道の旅』(JTBキャンブックス)、『台湾に生きている日本』(祥伝社)、『観光コースでない台湾』(高文研)など。台湾でも『台湾風景印-台湾・駅スタンプと風景印の旅』(玉山社)などの著作がある。台北の生活情報誌『悠遊台湾・2014』を近刊予定。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>